

	No. 4	No. 6
外観		
クロ組織		
赤色塗彩部のEPMAによる組成像 (COMP) と複合カラーマッピング	 	

図4 No. 4・No. 6の外観と摘出した試料の組織観察結果
外観の矢印は試料摘出位置。ミクロ組織枠内部をEPMAにより分析。

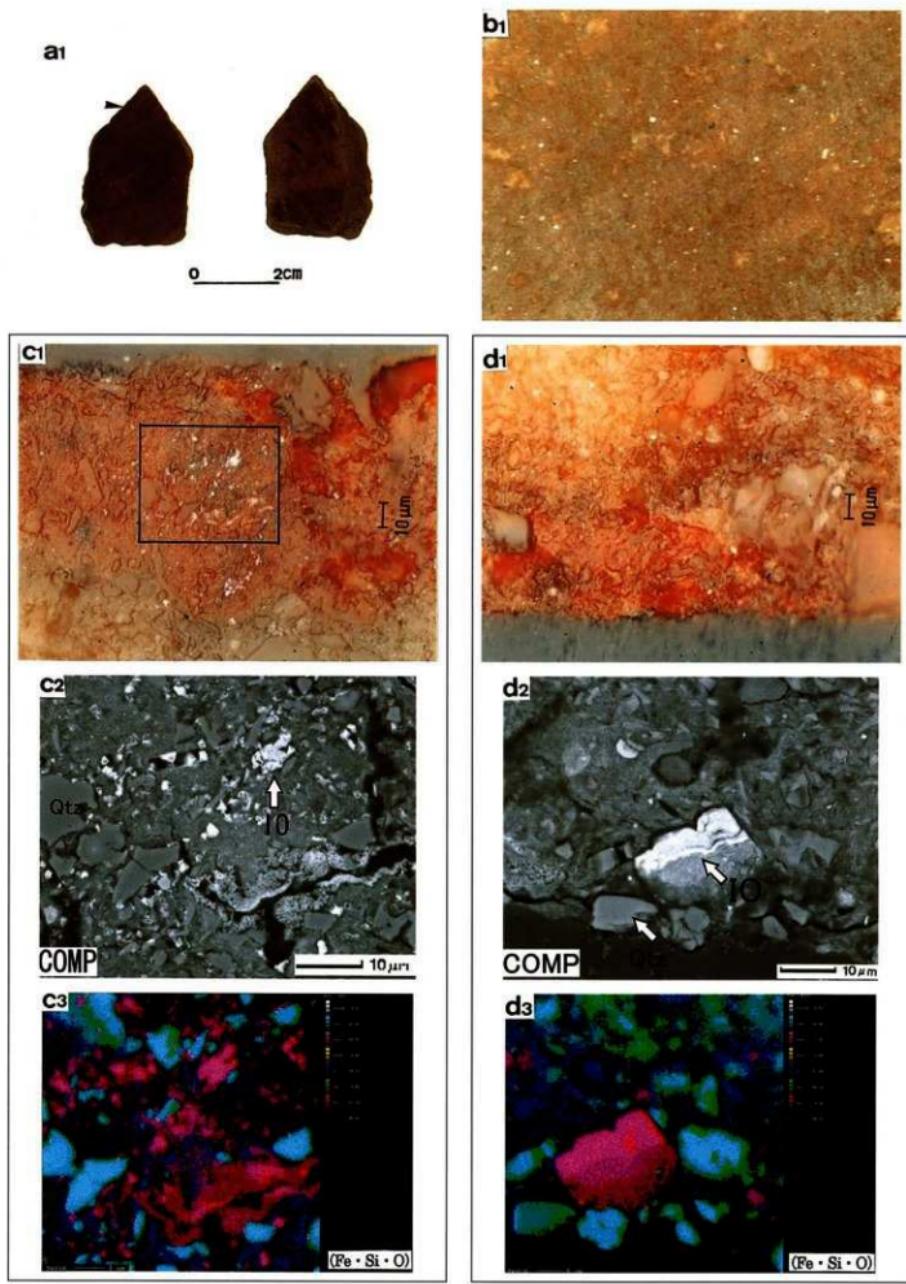


図5 No.5の外観と摘出した試料の組織観察結果

a1: 外観、矢印は試料摘出位置。b1: 表面赤色塗彩部のマイクロスコープによる拡大写真。c1: 表面赤色塗彩部のミクロ組織。c2: 赤色塗彩部のEPMAによる組成像 (COMP)。c3: c2に含有されるFe、Si、O濃度の複合カラーマッピング。d1: 表面赤色塗彩部のミクロ組織。d2: 赤色塗彩部のEPMAによる組成像 (COMP)。d3: d2に含有されるFe、Si、O濃度の複合カラーマッピング。

	No. 7	No. 8	No. 9
外観			
ミクロ組織			
赤色塗装部のEPMAによる組成像 (COMP) と複合カラーマッピング			

図 6 No. 7-No. 9 の外観と摘出した試料の組織観察結果
外観の矢印は試料摘出位置。

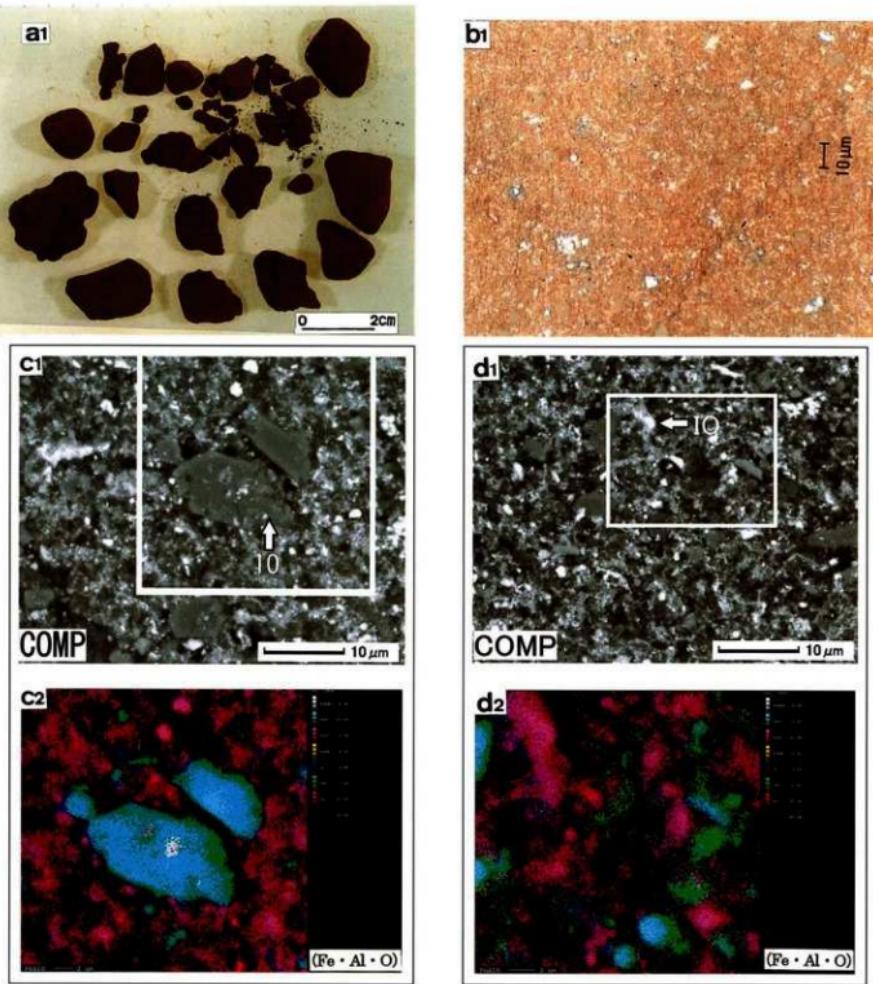
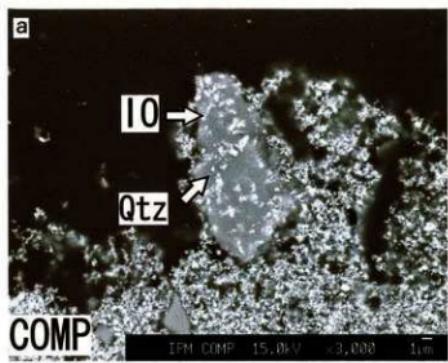
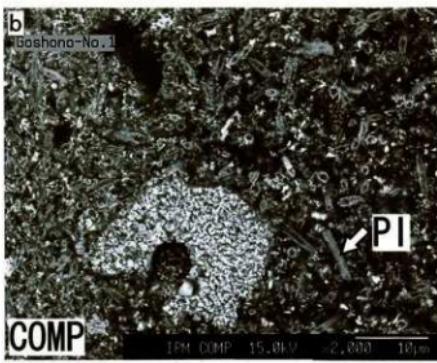


図7 No.10の外観と抽出した試料の組織観察結果

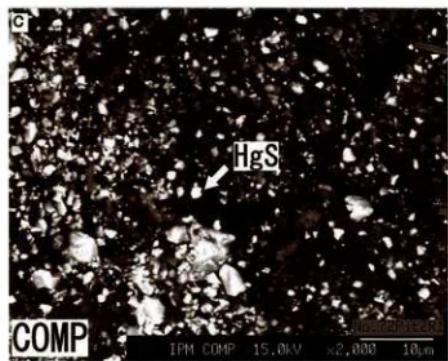
a₁:外観。b₁:抽出した試料のミクロ組織。c₁・c₂・d₁・d₂:それぞれ代表的な領域のEPMMAによる組成像(COMP)と鉄内部のFe、Al、O濃度の複合カラーマッピング。



[青森県青森市三内丸山遺跡出土。微細酸化鉄粒子 (IO)]



[岩手県一戸町御所野遺跡出土。パイプ状物質 (PI)]



[青森県六ヶ所村上尾鯨(2)遺跡出土。水銀朱 (HgS)]

図8 繩文時代から古墳時代に使用された代表的な赤色系色材料のEPMAによる組成像

V 総括

弥生時代後期後半から古墳時代前期における打出遺跡

弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構、遺物についてはA、B-1、B-2、の3地区から出土したもので大半を占めている。A区は旧神通古川の河道から弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器が多く出土し、とくにその川岸から出土したものには赤彩や三連壺といった特殊な形状をもつ土器も出土しており、水辺で行う祭祀の空間も存在していたと考えられる。

B-1区は堅穴住居跡5基をはじめとして溝、土坑などが検出されており、これらの遺構は概ねⅢ時期に分かれている。Ⅰ期は弥生時代後期後半であり、土器型式で言う法仏式段階の時期である。Ⅱ期4個体と高环3個体が一括で出土したSD38や旧神通川によって形成された自然堤防の堆積土などがこれに当たる。Ⅰ期はあまり遺構として顕著に見られないため、旧神通古川の度重なる洪水によって形成された自然堤防の高まりに住み始めた時期としたい。これは旧神通古川の対岸に立地する江代割遺跡についても同じように言える。Ⅱ期は弥生時代終末期であり、土器型式で言う月影式段階の時期である。遺構は堅穴住居跡5基、調査区南側の溝などが見られる。また、試掘調査においても堅穴住居跡がB-1区周辺で確認されているため、この段階に自然堤防が形成された狭い範囲に居住域が造られていたと思われる。ただし、正作り等の特別な生産活動は見られないため一般的な小集落であったと考えられる。Ⅲ期は古墳時代前期であり、土器型式で言う白江式から古府カルビ式段階の時期である。調査区の西端の溝群やSK17・18、29、31などの土坑などがこの時期に当たる。住居跡が見つかっていないがSK17・18のように廃棄土坑が見られるため集落としては維持されていたと考えられる。

B-2区は先述のⅢ期にあたる遺構が顕著であるが、大半は軌状遺構と呼ばれる小溝群である。軌状遺構の機能については畑作に関するものと考えられ、調査区とその周辺は打出遺跡の生産域であったと想定される。

以上のように打出遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期については旧神通川の氾濫等によって形成された自然堤防に立地した集落であり、弥生時代後期後半より集落が形成され始めたと思われる。弥生時代終末期の段階には小規模な集落としての機能を備えていたことは確実であり、古墳時代前期までは集落として維持されていたと考えられる。

中世から近世における打出遺跡

中世から近世の遺構、遺物についてはA、B-3、Cの3地区から見つかったもので大半を占めている。中世から近世にかけての時期は概ね遺構、遺物から4時期に分かれ、Ⅰ期は13世紀から14世紀にかけての時期、Ⅱ期は15世紀を前後する時期、Ⅲ期は16世紀を中心とする時期、Ⅳ期は17世紀～18世紀であると考えられる。

A区は旧神通川が埋没していく過程にあり、Ⅲ期になると河道が埋没した部分に井戸が構築されており、井戸からは縄の羽口や鉄滓が出土しており、打出の中世集落がA区周辺にも展開していることと羽口の大きさから大鍛冶が行われていることがわかる。この段階で現集落に繋がるもののが形勢されていたものと思われる。Ⅲ期の後半段階以降には旧神通川が完全に機能を失い、Ⅳ期では沼地状となっていたと思われる。

B-3、C区は井戸、溝、土坑、道路状遺構のほか掘立柱建物3棟などが検出されている。遺構、遺物の時期としては概ねⅠ期とⅡ期である。Ⅰ期には掘立柱建物、井戸が見つかっており集落の

存在をうかがうことが出来る。Ⅱ期は道路状遺構とそれに平行あるいは直行する溝が見られ、Ⅳ期の段階では集落自身はほぼ現集落の範囲に収まっており、耕地化が進んでいった時期と思われる。

中世から近世にかけての打出遺跡については、確認された部分が少ないため、部分的ではあるが、C区より南側に関しては中世段階での居住域ではなく、C区から現集落にかけての部分が打出の居住域にあたると思われる。

旧神通古川と打出遺跡について

今回の調査では旧神通古川の河口部の河道を検出した。現地表からの観察や試掘確認調査から総合的に判断しても古川あるいはカンの川と呼ばれた旧神通古川の河道であったと推測される。縄文時代の段階で打出の地は海底にあったが晩期から弥生時代になると海面が下降し、沖の方へと陸地が広がっていったと思われる。そして、縄文時代晩期の土器がB-3地区出土していることから、この時期には打出の地に何らかの営みがあったと考えられる。その後、旧神通古川の河道が打出の地へと流れ込み、洪水等の自然の營力によって形成された自然堤防上に集落がいとなまれたのが弥生時代後半の段階と思われる。この集落が古墳時代前期まで存続し、河道川岸には祭祀場が設けられ、その際に廃棄された赤彩土器や三連壺などが出土している。

古墳時代前期に集落が解体された以降、中世までの間については詳細不明であるが旧河道から8世紀末から9世紀前半の須恵器も出土しており、この時期における打出の地と旧神通古川との関係があったと思われる。また、南には今市遺跡が所在し、この遺跡との関連もうかがうことが出来る。

中世においては埋没過程があり、河道部分は渕や河跡湖のような状況であったと思われる。こうしたなかで土錐が出土しており、中世打出では漁撈活動が行われていたと考えられる。その後、天正年間の洪水によって川としての機能が完全に失われ、現在の状況に至っているものと考えられる。

まとめ

打出遺跡は旧神通古川によって形成された自然堤防上に立地する遺跡である。遺構、遺物から縄文時代晩期・弥生時代後期後半・古墳時代前期・古代・中世・近世の時期が存在し、その中心となるのが弥生時代後期後半から古墳時代前期と中世の時期である。そして、旧神通古川の氾濫、埋没という作用の影響を受けながら各時期における遺跡の変化が見られる。ただ、各時期において、交易、交流の中核拠点という感は無く、小規模な集落であると考えられる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては旧神通古川の自然堤防上を利用して極めて狭い範囲での集落が展開していると思われる。弥生時代後期以降放生津周辺の沖積地から周辺河川の自然堤防上や、扇状地へと集落立地における傾向の変化が県内の弥生時代の遺跡に見られ、打出遺跡についても、こうした状況下で成立した集落であると思われる。

中世段階では室町時代の貴族冷泉為広の「越後下向日記」に見えるルート上にあり、街道筋の集落で中世の万見保や食店庄といった社團に關係した集落と思われる。今回の調査では建物と仄画溝の検出をみたが、顯著なものではなく、むしろ中世打出の中心部分は現在の集落の下にあるように思われる。また、伝承等に見える中世岩瀬塗や打出宿についての検討が近年なされているが今回の調査ではこれに關係すると思われる遺物、遺構は見つかなかった。今後の調査の伸展により、打出遺跡の全体構造が明解されることを期待したい。

(藤山)

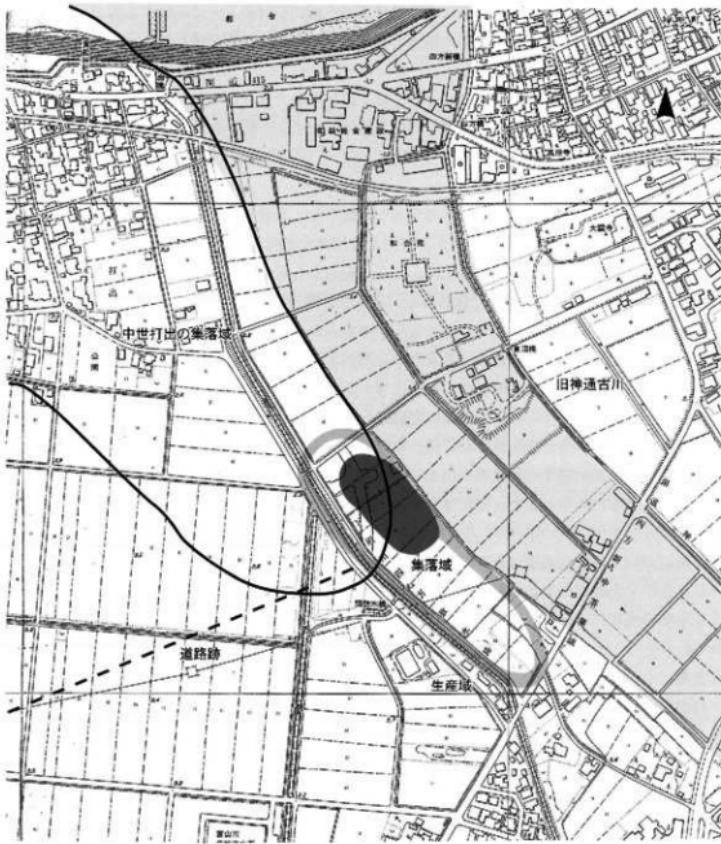


図1 打出遺跡の集落構造概念図

引用参考文献

- 石井逸太郎 1962 「富山湾海岸地帯の地学的調査」『富山湾海岸浸食調査報告書』
- 富山市教育委員会 1970 「富山市金草第一号窓跡調査報告」
- 藤井昭二ほか 1978 「富山湾西部海岸における海岸浸食」『自然と社会44』
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究2』貿易陶磁研究会
- 谷尾内晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『石川考古学研究会々誌26』
- 久々忠義 1984 「弘仁時代の時期区分」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・続編一』上市町教育委員会
- 穴水町教育委員会 1987 「西川島」
- 北九州市立考古博物館 1988 「北九州の中国陶磁」
- 富山市教育委員会 1988 「昭和62年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要」
- 富山大学人文学部考古学研究室 1989 「越中上末窯」
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群II」「研究紀要X」瀬戸市歴史民俗資料館
- 宮田進一 1991 「越中における中世土器の編年」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 東京都新宿区教育委員会 1992 「内藤町遺跡」
- 多治見市教育委員会 1993 「美濃麻の焼物」
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 「東日本における古墳出現過程の再検討」
- 北陸古代土器研究会 1993 「北陸古代土器研究 3」
- 北陸古代土器研究会 1994 「北陸古代土器研究 4」
- 瀬戸市史編纂委員会 1994 「瀬戸市史 陶磁編 4」
- 吉岡康輔 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 北陸古代土器研究会 1995 「北陸古代土器研究 5」
- 越前旗 1996 「梅原胡塚堂遺跡出土中世土器皿の編年」「梅原胡塚堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所
- 東京都新宿区教育委員会 1997 「南山伏町遺跡」
- 北陸中世土器研究会 1997 「北陸の漆器考古学」
- 北陸中世土器研究会 1997 「中・近世の北陸」桂書房
- 富山市教育委員会 1998 「富山市内道路発掘調査概要II 西方北岸遺跡」
- 久々忠義 1999 「古墳出現期の土器について」『富山平野の出現期古墳《先表要旨・資料集》』富山考古学会
- 富山市教育委員会 1999 「富山市内遺跡発掘調査概要III 四方北岸遺跡」
- 富山市教育委員会 1999 「富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 1999 「富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告」
- 富山市教育委員会 2000 「四方北岸遺跡」
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」
- 太宰府市教育委員会 2000 「太宰府糸坊跡XV」
- 立山町教育委員会 2001 「新瀬戸古窯」
- 深井其三・末原克 2001 「ふるさと富山歴史館」富山新聞社
- 北陸中世考古学研究会 2001 「中世北陸の井戸」
- 大野英子 2003 「越中中央部における古墳出現期の土器様相」『庄内式土器研究XXVI』
- 岡本淳一郎 2003 「越中西部地域における古墳出現期の土器様相」『庄内式土器研究XXVI』
- 婦中町教育委員会 2003 「鏡治町遺跡発掘調査報告」
- 森 隆 2003 「富山県の中世土器(資料編)」「富山県考古学研究 第6号」
- 財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所
- 川村浩司 2003 「古墳出現期土器の研究」高志書院
- 財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所 2004 「遺場I・II遺跡発掘調査報告」

VI 考察

打出遺跡、江代割遺跡から出土した土器の分類について

藤田 慎一

1 はじめに

近年、富山県内における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡や出土土器の事例が増加し、県内のこの時期における上器の分類、様相を考察した論考が多く紹介されている。その端緒として、久々忠義氏が弥生時代中期から古墳時代前期までの様相を捉えた論考を1984年に紹介し〔久々1984〕、これ以後、墳墓出土の土器を中心に編年を組み上げた高橋浩一氏〔高橋2000・2003〕、千坊山遺跡群を中心に越後負地域の土器分類し、その変遷を考察した大野英子氏〔大野2003a・b〕、下老子笹川遺跡を中心に佐野台地の土器様相を考察した岡本淳一郎氏〔岡本1999・2003〕、県内を4つに地域区分し、壺の分析を中心にして土器様相を論じた山中幸生氏、中谷正和氏の論考〔山中・中谷2003〕がある。今回、資料としてとりあげる打出遺跡、江代割遺跡はともに旧神通川の河口部に形成された小規模な集落であり、周辺に関連するような墳墓ではなく、また、遺跡内にも玉作工房址が見られないことから極めて一般的な集落であると言える。それゆえ外来系の土器もあまり見られず地色が顯著な土器様相をもつてであろうと考えられる。本稿は神通川の河口部という極めてミクロな視点から出土土器を分類し、そこから「越中の土器様相」を考えてみたい。

2 江代割遺跡について

打出遺跡については割愛するが、江代割遺跡は富山市の北西部、旧神通川の右岸の位置し、打出遺跡とはちょうど旧神通川をはさんで対岸に位置する遺跡である。1987年、富山市教育委員会によって調査が行われ、弥生時代後期包含層の上部で古墳時代前期の竪穴住居址、土坑等が検出されている。遺物は弥生土器、土師器、土玉などが出土している。土器の時期は古川知明氏により、法仏式、月影式、古墳時代前期の土器が見られると報告されている〔古川1988〕。

そして、打出遺跡とは距離が近く、同じ旧神通川の自然堤防上に立地していることから、遺跡の形成する条件も極めて類似している。また、三辻利一氏の胎土分析によると、打出遺跡と江代割遺跡の土器の胎土が極めて一致していると結果が出ている〔三辻2004〕。これらの条件から、打出遺跡の資料を補完するものとして江代割遺跡の出土資料も本稿では取り上げている。

3 出土土器の形式分類について

打出遺跡、江代割遺跡とともに全体の器形がわかるものが少ないため、口縁部や脚部の形態からの分類を中心に行った。その器種と型式は以下のとおりである。

1…壺

Aタイプ：頸部が屈曲して、口縁部に段をつくりだすものである。擬凹線を残らせるものとそうでないものとがあり、口縁の形状から内傾して短い口縁帯をつくるもの（A 1）と外傾して口縁帯をつくるもの（A 2）、直立した口縁帯をつくるもの（A 3）がある。体部は主として卵球形であり、器面調整は外面にタテ方向のハケメ、内面にはケズリが見られ、装飾については体部上半に列点文が施される。

B タイプ：頸部が屈曲して、口縁部が段をなして伸展するものである。A タイプとの違いは屈曲が緩く、口縁帯が上方へ伸びて長いものである。口縁の形状から外傾して伸展するものの（B 1）と直立して伸展するもの（B 2）がある。口縁帯の装飾は擬凹線を廻らせるもの（a）とそうでないもの（b）が見られる。

C タイプ：頸部が屈曲して、短い口縁帯が段をなして受口状に作りだすものである。そして、口縁帯には擬凹線を廻らせるものとそうでないものが見られる。この受口状のものは体部の形状にバリエーションが見られ、卵球形を呈するもの（C 1）、最大径が中位にあり、ラグビーボールのように体部が細くなっているもの（C 2）、小型のものでやや球形を呈して下部が窄まっていくもの（C 3）が見られる。

D タイプ：大型品である。頸部で短く屈曲して、口縁部が上方へと伸展し、下端を突出させるものである。口縁帯にはミガキがなされる。

E タイプ：頸部でゆるやかに屈曲して、口縁部が外傾して伸展し、その下端が突出するものである。山陰系の影響を受けたタイプのものと考えられる。

F タイプ：C タイプのものに近い形状をもち、頸部で屈曲し、皿のように丸みをもった受口状の口縁部をもつものである。

G タイプ：口縁部がくの字状になり、中位で稜をもち突出するものである。

H タイプ：頸部で屈曲し、口縁部が拡張しているもの。端部は面取りされて断面三角形を呈するものである。

I タイプ：いわゆるくの字タイプといわれるものであり、バリエーションが多いものである。I 1 は口縁端部を面取りし、断面が三角形状を呈するものである。I 2 は頸部をやや押さえたような屈曲で体部の最大径と同じ程度開くもの。I 3 は屈曲が緩やかであり、端部を面取りするもの。I 4 は口縁部に稜をもち、やや突出するもの。I 5 は強く屈曲して端部を丸く收めるもの。I 6 は大型製品で外反して伸展する口縁部をもつもので端部は面取りするもの。I 7 は比較的短い口縁部をもつもの。体部は肩の張らないものが付く。

J タイプ：畿内の布留系の影響を受けたもので頸部は、くの字で、口縁端部の内側が肥厚するものである。体部は球形あるいは肩の張らないラグビーボール状の形状をなす。

2…壺

A タイプ：長頸壺タイプのものである。口縁部に擬凹線が付くものと付かないものがある。口縁端部を面取りするもの（A 1）、やや外傾して上方に短く伸びる口縁をもつもの（A 2）、外傾して伸展する長い頸部をもつもの（A 3）、伸展した頸部で端部に丸みをもたせたもの（A 4）、有段のもので口縁の下端でやや突出するもの（A 5）、受口状の口縁部を呈するもの（A 6）が見られる。体部は卵球形、ソロバン状などさまざまな形状が見られる。

B タイプ：有段の短頸壺である。頸部で屈曲して外反して伸展するものである。

C タイプ：有段のもので頸部の屈曲が強く、口縁が外反（C 1）、外傾（C 2）して伸展するもの。

D タイプ：頸部で屈曲し、短い口縁帯が付くものである。体部はやや球形を呈するものである。

E タイプ：くの字タイプのもので、短い口縁部をもつものである。擬凹線をもつもの（E 1）と

そうでないもの（E 2）がある。体部は球形に近いもの（a）や卵球形のもの（b）がある。

Fタイプ：くの字タイプのもので、外傾して伸展する口縁部をもつもので口縁径が体部最大径より大きいものである。

Gタイプ：いわゆる小型丸底壺であり、畿内の布留系の影響を受けたものである。

Hタイプ：東海系の影響を受けた瓢壺に付く長頸のものである。

Iタイプ：頸部で大きく屈曲し、口縁部は上方へ拡張するもの（I 1）と断面三角形状に拡張するもの（I 2）がある。

3…高坏（坏部）

Aタイプ：底部が直線的に開き、中位で棱をなして外反し、口縁端部が拡張するものである。把手が付くものと付かないものがある。

Bタイプ：底部がやや皿状となるもので、中位で棱をなして外反し、口縁端部が拡張するもの（B 1）と口縁端部がやや直立して口縁帶を作り出すもの（B 2）がある。

Cタイプ：平坦気味の底部で段をなし、外反して大きく開くものである。段が突出するもの（C 1）と突出しないもの（C 2）がある。

Dタイプ：丸みをもつ皿状の底部から段をなすものである。大きく外反するもの（D 1）とやや小型で外反が弱いもの（D 2）段が突出し、外傾して開くもの（D 3）が見られる。

Eタイプ：皿状に大きく開くものである。

Fタイプ：小型のもので平坦な底部から外傾してやや開くものである。東海系の影響を窺える。

高坏（脚部）

Aタイプ：いわゆる棒状脚のもので、裾部で段をなし、外傾して開くもの。端部にはかえしが付くものが多い。半裁竹管文やS字スタンプ文などの装飾が施されるものが多い。

Bタイプ：Aタイプと同じく棒状脚のもので裾部は直線的にハの字に大きく開くもので、端部にはかえしが付くものである。

Cタイプ：細い脚で、裾部から外反して大きく開くもの。D 1タイプ坏に付くものが見られる。

Dタイプ：脚が短く、裾部で外反して開くもの。Dタイプ坏に付くものが多く見られる。

Eタイプ：受部の底部からハの字に開くもの。

Fタイプ：裾部のみであるが有段のものである。段の突出が弱いもの（F 1）と突出が強いもの（F 2）とが見られる。

4…器台（受部）

Aタイプ：いわゆる有段口縁のものである。短い直立した口縁帶をもつもので、下部は上方へと直線的に開く形状をもつ。口縁帶には棒状浮文や半裁竹管文等で装飾するもの（A 1）、擬凹線を廻らせるもの（A 2）無文のもの（A 3）がある。

Bタイプ：同じく有段口縁のものである。外傾して伸展した口縁帶をもつもので多くは擬凹線を廻らせるものである。台部も同様なものが見られる。

Cタイプ：Aタイプより小型のもので、底部より外反して開くもので口縁端部に面取りを施すものである。

Dタイプ：平坦な底部より、外傾して伸展するものである。円孔が廻らされるのが特徴である。

Eタイプ：小型のもので皿状の受部をもつものである。台部より受部が小さいものが多いのが特

徵である。受部が直線的に小さく開くもの（E 1）緩やかに外反して皿状となるもの（E 2）があり、端部が丸みをもつもの（a）と面取りするもの（b）とが見られる。

器台（台部）

Aタイプ：短い脚部をもち、底部にむかって外反して伸びるものである。有段口縁のものに付く。

Bタイプ：有段のもので、受部Bタイプの形状を台部にしたもの。擬凹線を廻らせるものが多い。

Cタイプ：受部の底部からやや開いて裾部で外反するもの。

Dタイプ：受部の底部からハの字に聞くもの。小型器台に付く。

5…鉢

Aタイプ：碗状の鉢部に伸展する口縁部が付くものである。口縁部の下端に明瞭な稜が付くもの（A 1）と、やや窪ませたような屈曲となるもの（A 2）がある。

Bタイプ：いわゆる有孔鉢で、砲弾形の体部をもち、底部に焼成前穿孔を施すものである。穿孔部分をややユビオサエで尖らせるものが見られる（B 2）。

Cタイプ：底部は底尖であると考えられ、直線的に聞くものである。口縁部に面取りを施すものと（C 1）とそうでないもの（C 2）とが見られる。

6…蓋

Aタイプ：内面に垂下するかえしが付くものである。摘みが伸びて逆台形になるもの（A 1）と、扁平なもの（A 2）がある。

Bタイプ：かえしが無いもので摘みが伸び上がるもの（B 1）とそうでないもの（B 2）とがある。

7…ミニチュア器種

Aタイプ：特殊な器形をもつものである。

Bタイプ：いわゆる手づくね土器で鉢状の形状をなすものである。

4 まとめ

以上の分類から各時期の主要な遺構と出土した土器の様相であるが私自身、浅学の上、まだまだ調整技法等の検討も必要であるが簡単に述べておきたい。

法仏1式段階

打出遺跡B-1地区SD38下層や江代削遺跡III層の出土資料が上げられる。壺A、高壺は壺部A・B、脚部A・Bが主体となる。江代削遺跡の資料では器台受部Aなどが見られ、比較的法量の大きな壺、高壺が主体となっている。

法仏2式段階

明確な遺構は見られないが打出遺跡B-1地区自然堤防の埋土が挙げられる。壺A2が出土しており、法仏1式段階に見られる壺A1は見られない。法量もSD38の資料に比べて縮小されたものである。

月影1式段階

打出遺跡B-1地区SI2、SI4の資料が挙げられる。伸展した有段口縁をもつ壺Dや、山陰系の影響を受けた壺E、壺B、高壺脚部E、Fなどが主体となる。このほか長頸壺タイプ壺Aなどが月影1・2の段階のものによく見られる。

月影2式段階

打出遺跡B-1地区SI1、SI3の資料が挙げられる。壺B、Cが主体であるがくの字タイプの壺Iの量もかなり増加する。壺では壺D、鉢では鉢Aが見られる。法量的にも前段階より小さなものが目立つ。A地区SX1では高坏坏部Dなどが見られる。

白江式段階

打出遺跡A地区SX1（神通古川旧河川道）での出土土器に多く見られる。壺はくの字のものが主体となる。このほかの器種としては、壺E・F・Iなどが多くを占める傾向となる。

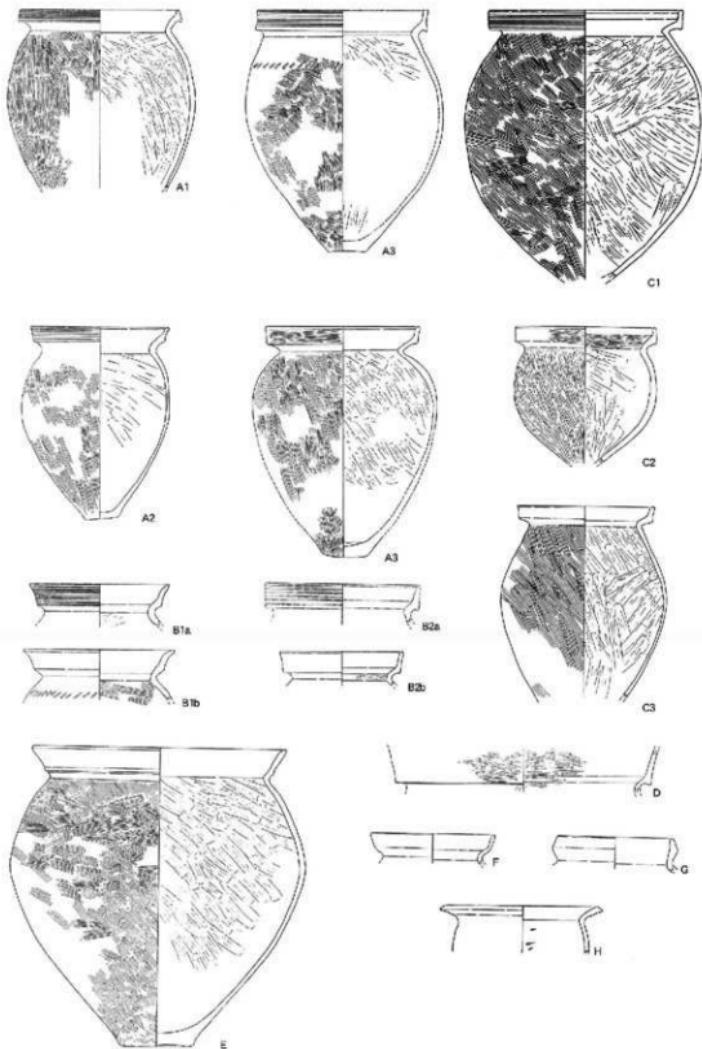
古府クルビ式段階

打出遺跡B-1地区SK17・18、B-2地区SD90等が挙げられる。壺I7、壺E、器台受部D、鉢Aなどが主体となり、くの字の壺が大半を占める傾向にある。

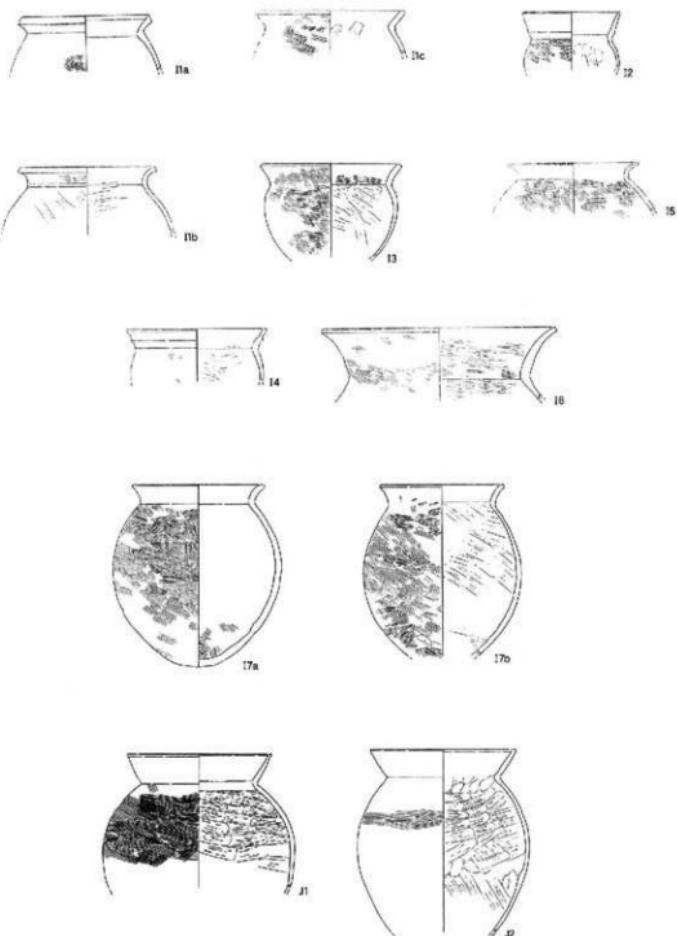
高畠式段階

江代割遺跡SK4が挙げられる。布留系の壺J、壺Gを主体とし、口縁形態はほぼ、くの字のもので占められる。壺の体部は布留系に見られる球形のほか、肩の張らないラクピーボールのような形状を呈するものが見られる。

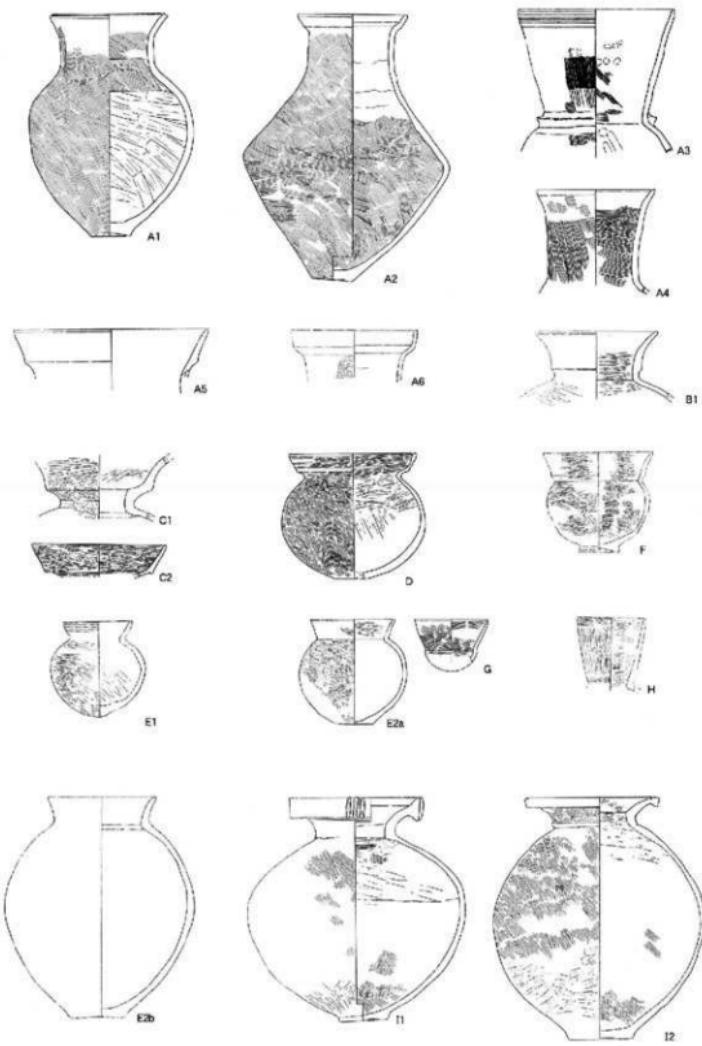
打出遺跡、江代割遺跡の出土土器は法仏式から高畠式段階までの各段階の資料が出土している。特色としては在地系のものがほとんどであり、白江式段階以降に東海系、高畠式段階には畿内系の布留式土器の影響を受けたものが若干見られる程度である。基本的に北陸系の範疇にあるが、越中の要素として考えられるものとしては壺、壺の体部の形状であろう。とくに、肩のあまり張らない壺C3、I7、J2というタイプのものが目立つ傾向がある。また、分類では触れなかつたが赤彩などが能登、加賀、越前地域と比較して多く、越中の土器の特色であろう。本稿は、筆者の浅学ゆえ、十分な考察をすることが出来なかった。これを今後の研究に活かして、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器様相をあきらかにしていきたい。



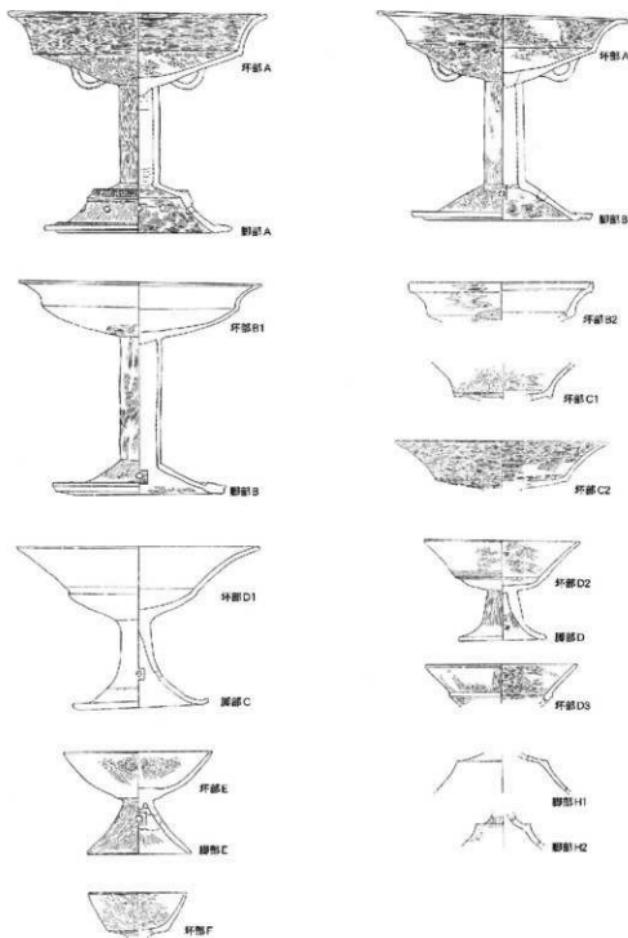
第1図 器種分類図（甕） スケールは1/6



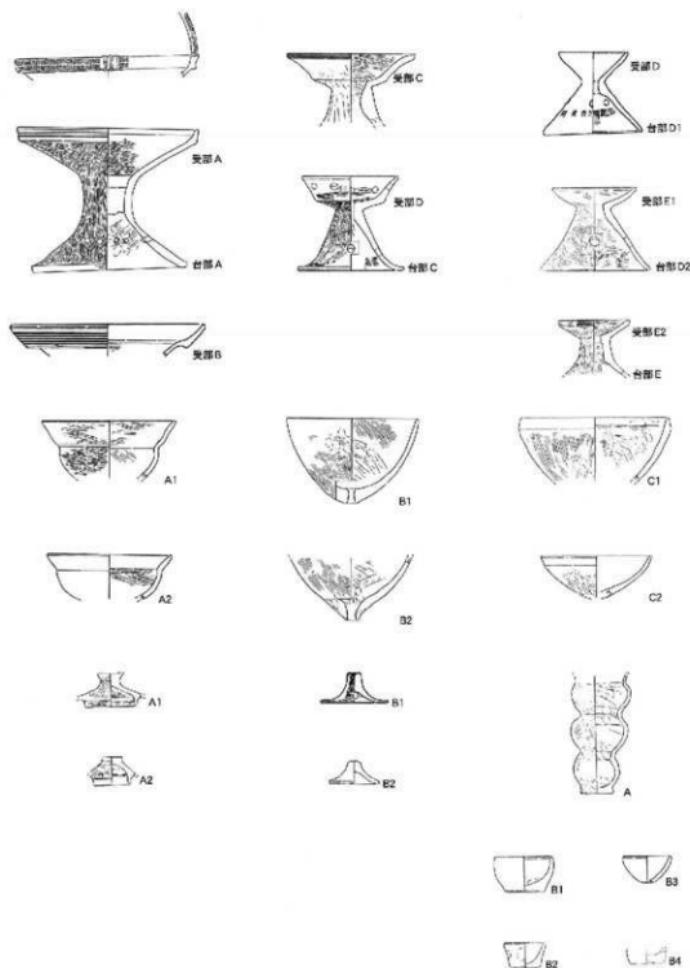
第2図 器種分類図(甕) スケールは1/6



第3図 器種分類図(壹) スケールは1/6



第4図 器種分類図（高坏） スケールは1/6



第5図 器種分類図（器台・鉢・蓋・ミニチュア）

参考文献

- 大野英子 2003 「越負における古墳出現期の土器の変遷」『鏡治町遺跡発掘調査報告』鏡中町教育委員会
- 大野英子 2003 「越中央部における古墳出現期の土器様相」『庄内式土器研究』XXVI
- 岡本淳一郎・三島道子・町田賢一・上田尚美 1999 「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』2
- 岡本淳一郎 2003 「富山西部地域における古墳出現期の土器様相」『庄内式土器研究』XXVI
- 木田清 1998 「法仏式土器の認識と再確認」『石川考古学研究会誌』41
- 久々忠義 1984 「弥生時代の時期区分」『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編ー』上市町教育委員会
- 久々忠義 1999 「古墳出現期の土器について」『富山平野の古墳出現期古墳「発表要旨・資料集」』富山考古学会
- 高橋浩二 1995 「北陸における古墳出現期の社会構造—土器の計量分析と占頃からー」『考古学雑誌』80-3
- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相—赤牛時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付けー」『庄内式土器研究』XXII
- 田中幸生・中谷正和 2003 「越中における古墳出現期前後の地域別土器編年」『豊氣樓』六一書房
- 古川知明 1988 「江代削跡」『昭和62年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
- 三辻利一 2004 「江代削跡、打出遺跡出土十器の蛍光X線分析」『打出遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 本報告書

		打出遺跡・江代削跡	縄角	越中				添町	畿内
後期	前期			大野(2003)	東横(2000)	久々(1999)	田中・中谷(2003)		
弥生時代 終末期	法 仏 1	SD38下層(打B-1)			古			第Ⅱ期3期	2群
	法 仏 2	自然堤防堆積土(打B-1)	I期		新				+ VI-3
	月 影 1	SI02-04(打B-1)	II-1期	吉	1				3群 庄内0
			II-2期	吉	2				4群 庄内1
	月 影 2	SI01-03(打B-1)	II-3期	古	3			2期	5群 庄内2
			II-4期	吉	4				6群 庄内3
	白 江		III期	吉	5			4期	7群 布留0
	古府クルビ	SK17-18(打B-1) SD80(打B-2)	IV期	吉	6				8群 布留1
古墳時代 前期前半	高 磬	SK04(江)	V期	新				5期	9群 布留1

表1 土器の併行関係



第6図 打出遺跡・江代割跡土器変遷図（スケールは1/12）

旧神通川河口部と中世打出について

藤田 慎一

1 はじめに

今回の調査では△区で神通川の旧河道をB-1区では旧神通川によって形成された自然堤防の一部を検出した。本調査の以前から古川知明氏によって打出遺跡の範囲内に存在することが推定されており、今回の調査の結果、これを裏付けることとなった。また近年、中世岩瀬濱調査研究グループによって海底調査などが行われ、この成果によって打出沖が中世の段階では陸地であり、「廻船式目」にみえる岩瀬濱が存在していたと考えられている。本稿では、発掘調査の成果と古川氏の想定した旧神通川を基に自然科学分析の結果および文献資料を踏まえて旧神通川の河口部と中世打出について論じていきたい。

2 文献資料から見た神通川の河口部と中世打出について

中世打出の所在する地は婦負郡万見保に属していたことが、元々打出の地に所在した極性寺の文書などに記述が見られる。万見保の成立年代としては、応永15（1408）年の將軍家御教書に初見が見られることからこの時期前後であろうと考えられる。それ以前については周辺の地名に倉垣の地名があることや打出の地に貴船神社が存在し、射水郡下村加茂に所在する加茂神社に末社として貴船社も勧進されていることから11世紀代には成立していたと思われる下鴨神社領倉垣庄となんらかの関係があったものと思われる。

神通川河口部と中世打出を知る資料としてまず、室町時代の公家冷泉為広が越後に下向した際に書かれた『越後下向日記』が挙げられる。これには、

十四日、白晩雨降、ハウシ津ノ普照寺ヲ立 アラヤ（荒屋） フシ稚現ノ御トヒアル社アリ
エビエ（海老江） メウシン（明神） 橋 ネリヤヒ（練合） イハウ アシラヒ單（足洗）
ウチデ單（打出） シバクサ ヨカタ單（四方） イワセ渡（岩瀬）、大河あり、里カミイ
ワセ ナカエノ木單………

とあり、打出は富山湾に沿ってつくられた後に浜街道と呼ばれる道に立地する集落であったと思われる。また、この日記が書かれた延徳3（1491）年の段階には、神通川の本流が岩瀬へと移っていたことがわかる。このほかに伝承を記述したものであるが江戸時代に書かれた野崎伝助の『喚起泉達録』があり、越中の古伝承を書き継ねている。その巻十二、天児六郎が変には、

打出昔三千軒ノ家在テ打山宿ト唱濱ヲ勤テ………（略）…………打出村千軒ノ宿ナリト云
シヨリ數度ノ高波ニ居所ヲ破ラレ今時云打出村ハ六度南へ逃上リタリト云リ古ト今ト語ラン
トスルニ浩達ハ多カルベシ然ドモ花ガ墓所ヨリ見時ハ又占ヘモ知安キモ云ベキ也

とあり、打出には三千あるいは千軒の住居がある宿場町であり、高波で被害を受け、今では六度南へ移って来ていると伝えられている。こうした記事は伝助の孫、野崎雅明の『肯溝泉達録』にも同様の記述が見える。伝承であるため、真偽ほどはわからないが、中世段階では打出の集落が存在し、高潮などの災害によって集落の位置を変えていたことが考えられる。こうした災害による移転に関するものとしては、現在四方西岩瀬に所在する海禅寺の縁起に、一尺五寸の黄金の釈迦如来像が切り揚げられ、この寺の開基である仏性上人が打出の地に七堂伽藍を建立し、祀ったのが始めといわれている。その後、天徳2（957）年に海岸が崩れ、西岩瀬に移ることが記述にある。また、四方の四方神社の伝承に昔五社宮を鎮守としていたとあり、[高瀬1964]これが海

底に残る五社宮の地名に関連するものと思われる。

これらのことから、10世紀以降には確実に波の浸食や高潮などの災害によって富山湾の海岸線が後退し、守社や集落自体が位置を伝承のように海禪寺のように現在の地へ移ってきたものと思われる。

洪水に関するものについては16世紀以降の資料にしか見られないが、天文13年（1569）天正8年（1580）に大きな神通川の氾濫に見舞われている。17世紀の記述でも4回の大洪水の記述が見え、中世段階においてもかなりの暴れ川であったことがわかる。そのため、川の範囲内での河道や地形の変化、上砂の流出、堆積は著しいものであったと考えられる。

これら文献史料から神通川河口部は高潮あるいは洪水によって集落やその周辺空間の大きな変化が見られる。とくに中世の海岸線がかなり北にあったことは注目すべきものである。富山湾は波による侵食を受けやすく、近世の地図資料と比較してみても現在の海岸線が後退していることがわかる。そして、打出沖に集落の存在を示していると思われるは『婦負郡志』に、海辺で井戸が見つかり、青磁の小皿が引き揚げられている記事が見える。また、昭和25年に打出で行われた護岸工事の際海岸線に井戸跡と五輪塔の残欠が出土し、古者の話によると高波の際に、汀線付近で井戸が見られたことを高瀬保氏は紹介している〔高瀬1969〕。

以上のことを考えると中世打出と神通川の河口部は現在の景観とはやや異なっており、中世には港として栄えた放生津と岩瀬湊を結ぶルート上有る集落であり、そこには極楽寺や五社宮などの寺社が所存していたことがわかる。また、河口部については10世紀の段階より海岸線の後退が始まり、高潮や洪水といった一時的なものもありまつて、大きく変化しており、中世段階には打出遺跡のそばを流れていた神通川が東へと本流をかえていたものと考えられる。

3 発掘調査の成果と自然科学分析から見た神通川河口部と中世打出について

発掘調査では、神通川河口部分に関してはA地区で旧神通川の河道を検出し、古墳時代前期のものと考えられる川岸を確認した。川の部分からは弥生後期後半から近世にかけての遺物が出土している。B-1地区では自然堤防の部分を掘削し、その堆積土から弥生時代後期後半の甕を2個体検出している。中世打出に関する遺構についてはA地区は井戸1基、B-3地区、C地区は崖敷地を区画したと思われる溝が数条、掘立柱建物が3棟、井戸7基、道路状遺構が検出され、遺物は珠洲焼、土師器、八尾、国産陶器、中国産陶器、漆器碗などが出土している。A地区は旧神通川が埋没していく過程で掘り込まれた井戸であり、SE3やSE4は遺物等から16世紀前半頃のものと思われる。B-3地区やC地区は現集落の南に位置しており、中世段階における打出集落を示すものは断定出来ないが遺物から12世紀後半から13世紀前半を中心とした年代が示されている。

また、今回の調査では旧河道内で採取した土壤をパリノサーヴェイに委託して珪藻分析を行った。詳細は本報告書内に記述しているので割愛するが、要約すると、検出された珪藻化石群集は汽水～淡水生種が検出されており、旧河道の上層と下層で珪藻の組成が異なっている。下層では、汽水～淡水性の止水性種が特徴的にみられることから、当時は河口部の潟のような止水域であったと推測される。上層では汽水生種や中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多く見つかっていることから、氾濫の影響を強く受けて土砂が供給されたようになったと推測される。このことから、A地区で検出された河道は、古墳時代前期頃に流路の中心が他に移ったため河跡湖のよう

な状態になったが、氾濫の影響を受けて、中世頃までには完全に埋没したと分析されている。

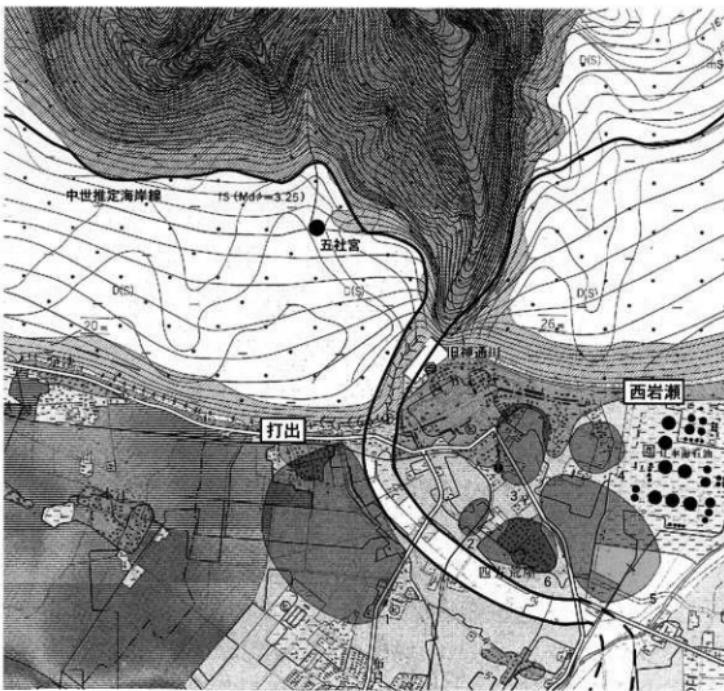
これらを含めて考えると旧神通川の河口部は古墳時代前期までは神通川の本流としての機能を果たしており、その後、河跡湖や河口潟の時期が古代以降続き、氾濫の際にには流路として土砂が運び込まれ埋没していったと思われる。A地区から検出された16世紀の井戸とパリノサーヴェイによる分析とは一致していると考えられる。

4 結語

以上で文献史料と発掘調査から旧神通川河口部と中世打出について考えてみた。中世岩瀬湊研究グループの成果では中世打出については四方沖に比定されている岩瀬湊と旧神通川を挟んで対岸に古伝承の打出宿があったとしている。海底地形や現在海となっている部分からの井戸の発見等もあり、現在、国道415号線より南にしかない現集落が中世にはその北側にも集落の存在をうかがうことが出来るが、まだまだその実証については難しい。打出遺跡と旧神通川との関係については、洪水や富山湾の浸食作用によって景観が変化し、断片的ではあるが、集落の立地などに変化を与えていくように考えられる。

参考文献

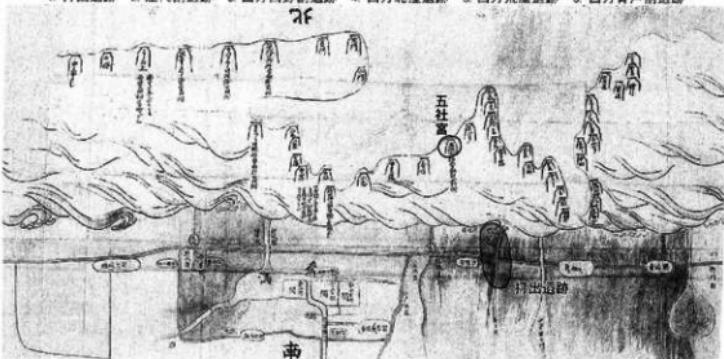
- 婦負郡役所 1909 「婦負郡史」
石井逸太郎 1952 「富山湾海岸地帯の地学的調査」『富山湾海岸浸食調査報告書』
高瀬保 1969 「古文書からみた放生津湯の変遷と射水平野の形成」「放生津湯周辺の地学的研究」
藤井昭二編 1974 「富山湾（富山文庫3）」巧玄出版
藤井昭二ほか 1978 「富山湾西部海岸における海岸浸食」『自然と社会』44
布目久三 1982 「四方郷土史話」
布目久三 1987 「西岩瀬郷土史話」
深井甚三・米原寛 2001 「ふるさと富山歴史館」富山新聞社
広瀬誠 2003 『神通川と呉羽丘陵』桂書房
富山市教育委員会編 2004 「日本海文化を考えるゼミフォーラム「中世岩瀬湊を探る」」
発表資料
パリノサーヴェイ 2004 「打出遺跡自然科学分析」「打出遺跡発掘調査報告書」
富山市教育委員会 本報告書



第1図 古墳時代～中世における打出遺跡周辺

富山市教育委員会編「日本海文化を考えるゼミフォーラム「中世沿岸路を探る」」を基に作成。(下部は国土地理院発行、沿岸土地条件図1981を使用した。)

1. 打出遺跡
2. 江代剣道跡
3. 四方西野剣道跡
4. 四方北座遺跡
5. 四方荒屋道跡
6. 四方背戸剣道跡



第2図 富山湾網場の図(故高瀬保氏蔵 ふるさと富山歴史館より)

打出遺跡出土の管状土錘について

新宅 輝久

1 はじめに

人間の営みの中で最も重要な行為は食料の確保である。現在もまたそうである様に古来から、食材の確保は常に一つの大きな課題であった。それは縄文時代の狩猟・採取中心の生活から、有用栽培植物の栽培やタンパク質の確保のための漁業や家畜の飼育へと移行し、近代経済の中ではそれは第1次産業と言われるに至っている。

打出遺跡で検出した弥生後期から中世に至るまでの時の流れの中では、実際にどの様な形で食物の確保を行っていたのであろうか。海岸線まで500mほどのこの現場でまず考えられるのが、漁業である。特に『廻船式目』に見られる『越中岩瀬湊』の存在が示す様に、海との関係は切り離せないものであったと考えられる。また今回の調査の自然科学分析の結果から、A区で検出した神通古川の旧河道は、ある時期にはデルタ化していた事が判明しており、内水面での漁も考えなければならない状況である。

その様な状況のなかで、出土した遺物からその痕跡を追えるのは、漁に使うとされている管状土錘だけであった。この管状土錘は実際に海の漁具として使われた物なのであろうか、また内水面の漁での使用と、海での使用に違いが見られるのかなどいくつかの疑問が存在する。

そこでここでは、この管状土錘の種類別からの用途の違いについて、形状の違いや重量など変化から、その用途に違いが見られるのか、さらに民具などの対比から打出遺跡出土の管状土錘がどの様な条件下での使用が有効なのかについて、考えたいと思う。

2 地区別出土遺物の傾向

試料として使用した管状土錘の出土傾向は、打出遺跡で検出した神通古川の旧河道から出土したもののがほとんどであり、全体の72%であった。次に多く出土したのが、C区であり16%であった。残りのB-1地区・B-2地区・B-3地区ではそれぞれ2~8%の値を示している。(第3表参照)

この地区別の出土傾向から見た場合、中世の造構が検出された地区からの管状土錘の出土が顕著に見られる事が看取される。

しかし、下記に記した各地区的主体をなす時代から、C区と隣接するB-3地区は、その出土量こそ少ないものの、C区との位置的な関係から、両地区を合わせた形で考えた場合、23%となり、中世を主体とする、また中世が関係する調査区からの管状土錘の出土が顕著に見られる事がわかる。

A区：弥生時代終末、奈良、平安時代、中世、近世

B-1区：弥生時代後期～古墳時代初頭

B-2区：弥生時代後期～古墳時代初頭

B-3区：弥生時代後期～終末、中世

C区：中世～近世

3 土錘分類方法とグラフ使用試料の選定

出土した管状土錘の分類は、山本直人氏〔山本1986〕の形態分類を参考に大別した細辻分類〔細辻2001〕に準じて分類した。ここで掲載した遺物については、そのものの残存率に関係なく提示しているが、グラフ試料として使用したものについては、その残存率が70%を超えるもののみ使用している。これは、出土した管状土錘の重量から漁法を推定するためであり、そのものの淡水時や海水時の水分を十分に吸水した時点での重量から実際に漁に使用したときの重さがどの様なものであったかを見るためである。

4 淡水時・海水時の重量変化

土錘の使用方法等を考える場合、特に重要なのは重量の点である。水中に投下して使うこの遺物が、実際にどの程度水分を含んで重くなるかが最も気になる部分である。土師器などの吸水率は菅原氏が述べられている様に〔菅原1986〕焼き締まりが悪いれば、比重が低く、吸水率が高い、と述べられている。実際に管状土錘でどうであろうか。前述したとおり、打出跡跡は海水・淡水の両方で漁を行う事の可能な痕跡である。よって淡水時と海水時での吸水力に違いが見られるかについても考えなければならない部分である。今回は、淡水と海水の両面から重量変化に違いが現れるかの確認を試みた。

まず、分類した管状土錘毎に1時間までは10分毎に重量の計測をし、その後は、5時間の間で、30分毎に重量計測を行った。その結果を管状土錘毎にグラフに表している（第5表参照）。グラフに使用した数値は、各時間の重量平均値を元にグラフ化している。

その結果、下記の事が明らかとなった。

①素焼き管状土錘別の飽和状態になる傾向に2種類の特徴が見られる。

大きく分けて2種類のグループができる。1つが水中に浸けてから1時間から3時間と最大重量に達するまでに長い時間を必要とする寸胴型c類、樽型b類、樽型c類、のI群がそれである。2つ目が最大重量に達するまでに30分～50分と短時間で到達する寸胴型d類、樽型a類、卵型c類のII群がそれである。

I群は、淡水と海水の最大重量に達する時間の差は約30分から1時間であったが、II群に比べて淡水・海水共に重量変化は緩やかであると言える。

II群は淡水と海水の最大重量に達する時間の差は約30分から1時間と、I群とさほど変わりが見られないものの、I群に比べ淡水時の最大重量への到達時間が1時間以内とII群と比較して極めて早い結果が出ている。

②淡水・海水時ともに、重量は、最終的には約15～40gほど増加する。

どのタイプの管状土錘とも、海水・淡水時ともに最大重量には変化は見られない。しかし、樽型a類において、他の土錘が約15gから20gの重量変化であったのに、約40gの増加を見ている。これは、土錘の形状や使用する漁に関係したものなのか、現段階では不明である。

③素焼きの管状土錘に比べ、陶錘は、素早く増え、しかも約6gほどとさほど重量変化はない。

陶錘の変化は、海水・淡水時ともに、約5分で最大重量に達し、重量も素焼き管状土錘に比べ重量の変化があり無かった。これは陶錘の外面に釉薬がかかっていることから生じている事と推察できる。素焼き土錘に比べ陶錘の方が沈降力において強い傾向が見られると云う結果が宮本氏によって提出されている〔宮本1956〕。これは徐々に重量が増す管状土錘と素早く重量を増す陶錘の結果に符号するものである。

5 重量と孔径の関係

任海宮田遺跡で出土した管状土錘から、漁網の特定の1要因として土錘の重量と孔径の関係について提示したものがある〔細辻2001〕。今回はこれに従い、管状土錘の孔径と淡水時や海水時の最大重量の関係について散布図を作成し、その傾向を観察したいと思う。

散布図（第6表）では、海水時と淡水時の重量において、その分布には孔径の1.5cmのラインで一定のグループ分けができるようである。まず孔径1.5cmを境に、重量50g前後で1グループとなるものと、孔径1.5cmから2.0cmで重量100gから150gの範囲に分布するもの、さらに孔径2cmから2.5cmで重量が150gから250gのグループがそれにあたる。打出遺跡出土の管状土錘の中で、孔径が小さく重量の比較的軽い部類に入るものは、個数的には少なく傾向としては1.5cmを越えてのグループが大半を占める事がわかり、用途としてある程度重量のある孔径の大きなものを多様する漁が行われていた事が看取される結果であった。

6 漁網方法の大別

では実際にはどの様な漁が行われていたのであろうか、打出遺跡は、神通古川の旧河道と富山湾の両方に面した位置に立地した遺跡である。そのため漁場は、河川と海の両方に存在可能な状況であった事が想定できる。管状土錘を使用する漁網には、いくつかの種類があげられる。大沼芳幸氏によって以下の3種類に大別されている〔大沼1989〕。

①漁網錘を垂直方向への強い接地力を得るために用いるもの。

一部の曳網・・・・底曳網など低層魚類の獲得を主とする漁の場合、強い接地力が必要。
一部の刺網・・・・流れのある水域で用いる漁法のため、水流に押し流されない程度の重量の錘を必要とする。また投網（投げ刺網）は、網自体を遠くまで投げる必要性と、水中で素早く広がる必要があるため重量のある錘が重要。

一部の巻網・・・・建網などの網漁では、その漁の特徴から極めて強い接地力を必要とする網の下辺は底に確実に接地し、河川漁の場合は、さらに水流に押されない程度の接地力を必要とする。

一部の掩網・・・・打網の場合、魚が逃げるのを防ぐため強い力を必要とする。また網の沈下速度を速めるために密度が高く重量のある材料の魚網錘を必要とする。（石錘か？）

定置網・・・・定置網の垣網は、魚の通路遮断を効率よく行うため、強く接地する必要がある。

②浮子との相互作用により、網を開口させるために用いるもの。

一部の曳網・・・・中層魚を対象とした曳網の場合、浮子とのバランスにより、網を中層位に保ち、かつてより大きく網を開口する必要がある。

一部の巻網・・・・浮子とのバランスがにより袖にあたる部分を立たたすとともに中央漁獲部を開口させる必要がある。機能的には底引網と共に通する部分が多い。

③網のバランスを保つだけに用いるもの。

刺網・・・・一般的に刺網類は水中にユラユラ立っている状況が望ましい。これは緩張することにより当たった魚が自然に網を押して刺さるからである。(中略)水流のほとんど無い水界の場合魚網錘の重量は少なくてすむ。しかし河川など水流の強い水界の場合は、網が水中で立つか、立ちつつ流れるだけのバランス力が必要となるため浮子、魚網具や大型のものを用いる事が必要になる。

上記の事をふまえて、魚網と土錘の関係についてまとめると、以下の事が考えられる。

①漁網錘を垂直方向への強い接着力を得るために用いるもの

この漁法に該当するものは、曳網・刺網・巻網・掩網・定置網などが上げられる。特に掩網は、急速に水中で沈下する必要がある漁法であることから考え、密度の高い重量のある錘などが最適と考えられる。また刺網の中でも特に投げ刺網なども同様な理由から密度の高い重量のある錘が考えられる。

曳網・巻網は掩網や投げ刺網より更に重量のある錘が必要であったと考えられる。

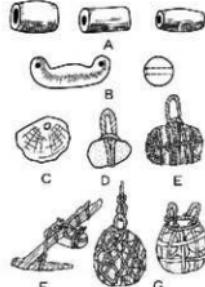
刺網の一部などはその漁法から、上記2グループのものより、さらに密度の高い、重量錘が必要であったと考えられる。しかし、この漁の場合、錘の重要性もさることながら、網を垂直固定させるための上俵や錨(第1・2図参照)の存在が、網の中立維持に大きな影響を与えていたと考えられるものである。

定置網(建網)は、富山の場合、中世からその存在はあったとされ〔宮本1956〕、特に台網類(第2図参照)の発祥地の1つに上げられているほどである。

しかし、その規模や漁法から考え、かなり大型の錘が必要であった事が想定でき、今回出土している管状錘で対応できていたとは考えづらい。

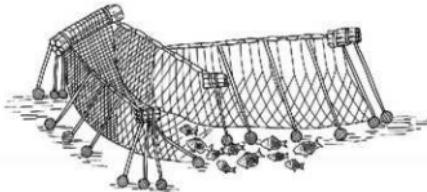
②浮子との相互作用により、網を開口させるために用いるもの。

曳網の場合、浮子とのバランス関係から、網の垂直中立を保たなければならない事からかんがえ、①の漁法で使う錘よりは重量の軽いものであった事が考えられる。また巻網も同様な事が言える。

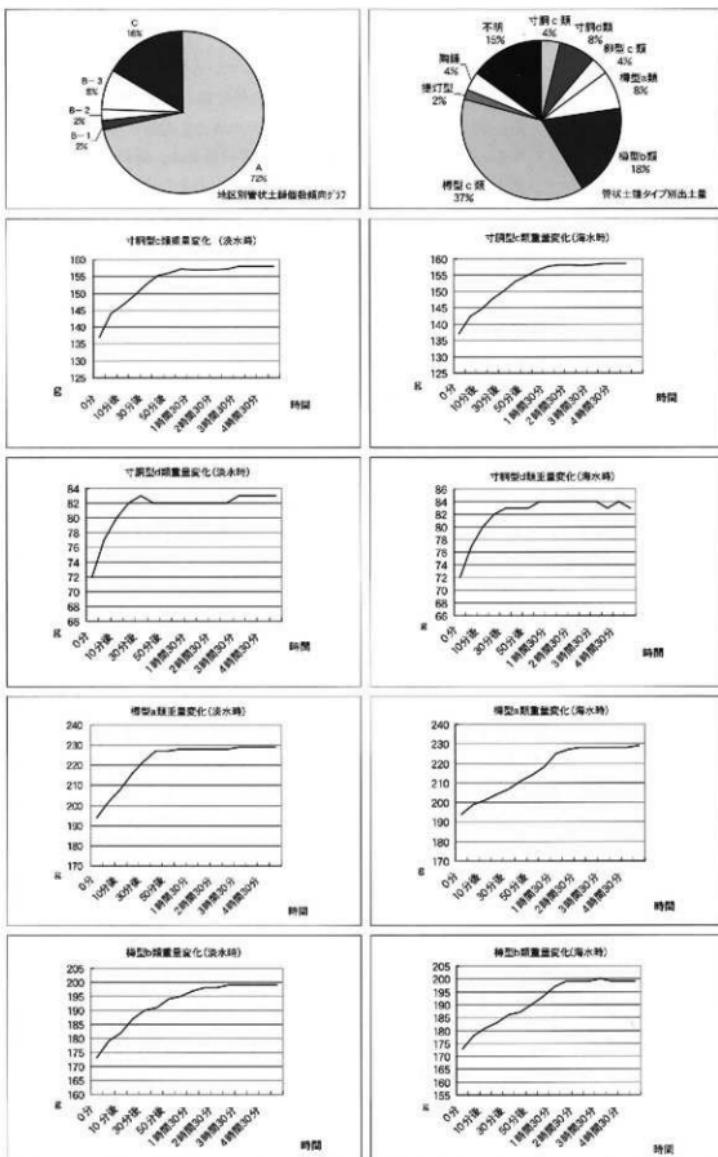


第1図 沈子及び土俵、錨

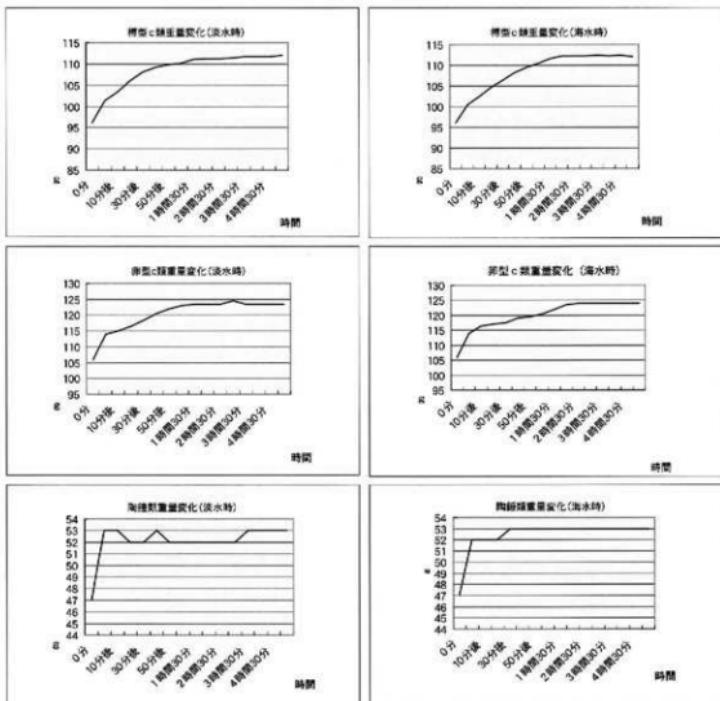
- A:陶製、煮燒または船製、中央に沈子座を通す孔がある。
B:投擲用沈子 C:貝殻
D:石 E:土俵 定置網固定用
F:木綿 小型漁具固定用
G:ビク 定置網用



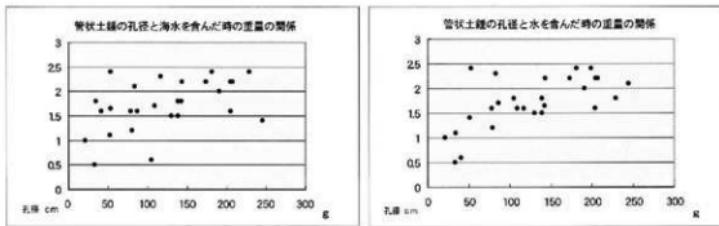
第2図 天明時代の富山湾ブリ台網(羽原)
舟網50尋。垣網20尋内外。漁夫20人。漁船2隻。漁場。距岸10丁乃至1里



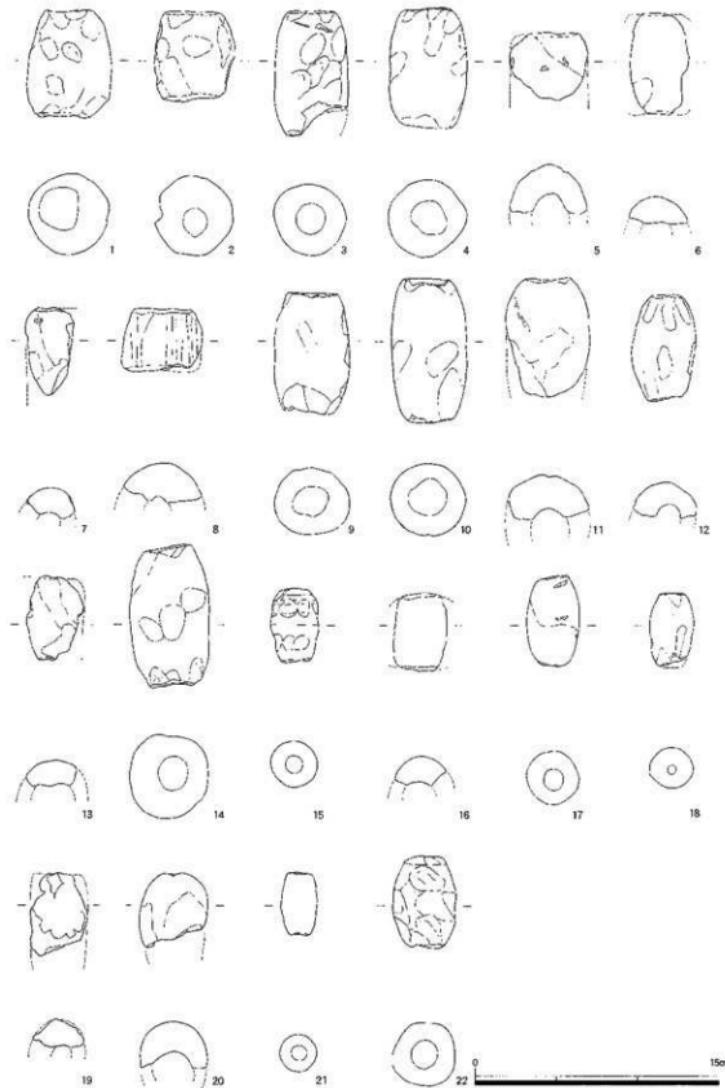
第5図 淡水時・海水時の重量変化①



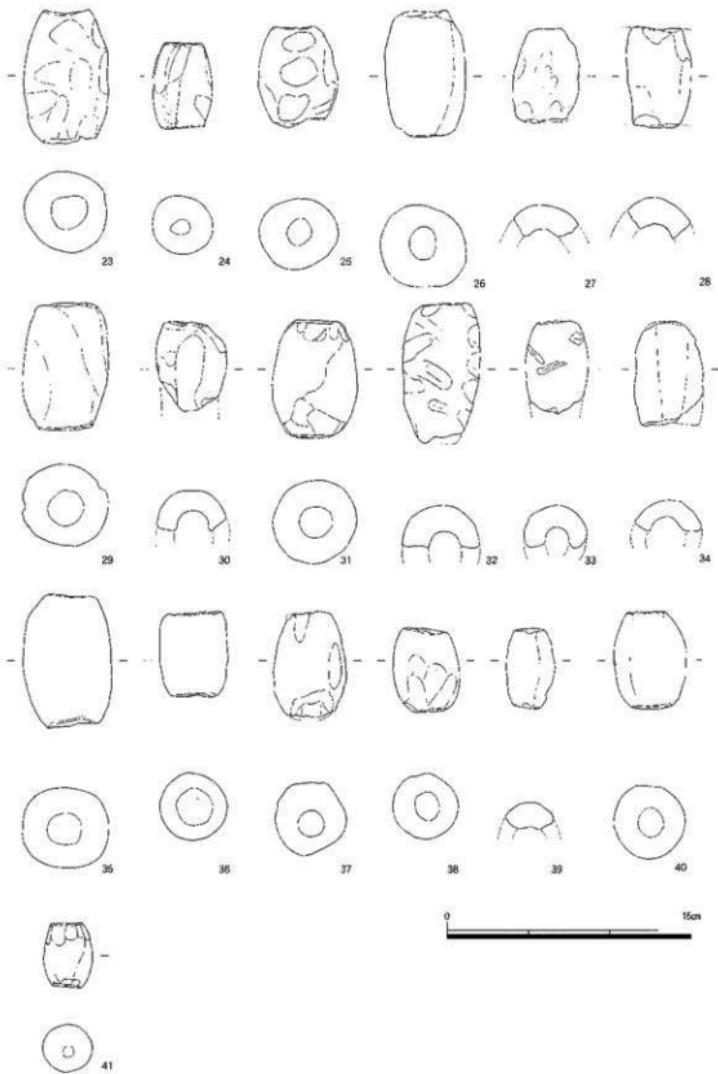
第6図 淡水時・海水時の重量変化②



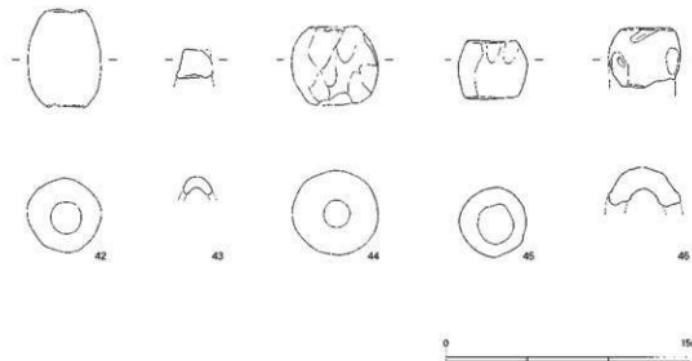
第7図 管状土錐の孔径と淡水・海水を含んだ時の重量の変化の関係



第8図 打出遺跡出土土鐘実測図① (1/3)



第9図 打出遺跡出土土錐実測図② (1/3)



第10図 打出遺跡出土土錐実測図③ (1/3)

回収番号	出土地点	種存率 形状分類	法面			a 全長(cm)	b 幅(cm)	c 厚さ(cm)	孔径(cm)	乾重(g)	水を呑んだ時の 最大重量(g)	海水を呑んだ時の 最大重量(g)	吸水率(%) (b-a)+c×100	吸水率(%) (c-a)+c×100
			左	右	上									
1-1	A地区SX01	100% 尺型	6.4	5.1	1.55	2.4	158	-	-	181	182.0	12.7	-	13.2
1-2	A地区SX01	90% 尺型	5.4	4.9	2	1.5	122	-	-	139	139.0	12.2	-	12.2
1-3	A地区SX01	80% 尺型	6.8	4.5	1.35	1.8	120	-	-	139	139.0	13.7	-	13.7
1-4	A地区SX01	100% 尺型	7.4	4.8	1.35	2.2	148	-	-	173	174.0	14.5	-	14.9
1-5	C地区SD01	40% 尺型	4.1	4.7	1.8	-	42	-	-	49	49.0	14.3	-	14.3
1-6	B-2地区包含層	50% 不明	6.2	3.6	1.5	-	33	-	-	36	36.0	8.3	-	8.3
1-7	A地区SX01上層	30% 不明	5.3	2.7	1.55	-	17	-	-	21	21.0	19.0	-	19.0
1-8	B-2地区包含層	50% 尺型	3.7	4.7	2.05	-	55	-	-	61	61.0	9.8	-	9.8
1-9	A地区SX01	100% 球型	7.3	4.5	1.2	2.2	120	-	-	143	144.0	16.1	-	16.7
1-10	A地区SX01	90% 球型	8.9	4.7	1.15	2.4	173	-	-	199	200.0	13.1	-	13.5
1-11	A地区SX01	50% 球型 ?	7.3	4.9	2	-	70	-	-	87	87.0	19.5	-	19.5
1-12	A地区SX01	50% 球型	6.4	3.8	1.4	-	36	-	-	44	45.0	16.2	-	16.0
1-13	A地区SX01	30% 不明	5	3.1	1.6	-	19	-	-	23	23.0	17.4	-	17.4
1-14	A地区SX01	100% 球型	8.8	4.8	1.7	.8	194	-	-	229	229.0	15.3	-	15.3
1-15	A地区SX01	100% 球型	4.5	2.8	0.9	-.1	31	-	-	34	35.0	8.8	-	11.4
1-16	A地区SX01	40% 不明	4.8	3.1	1.5	-	25	-	-	25	25.0	8.0	-	8.0
1-17	A地区SX01	100% 球型	5.5	3.5	1.1	.4	44	-	-	52	52.0	16.4	-	16.4
1-18	B-2地区SD23	95% 球型	4.2	2.7	1.1	0.5	27	-	-	33	33.0	18.2	-	18.2
1-19	CH地区SD01	40% 不明	4.6	3.0	1.1	-	27	-	-	30	30.0	10.7	-	10.7
1-20	CH-B地区SD01	40% 不明	4	4.1	1.8	-	26	-	-	34	34.0	23.5	-	23.5
1-21	B-3地区SD22	100% 球型	3.8	2.2	0.8	.1	17	-	-	21	21.0	19.0	-	19.0
1-22	CH地区SD06	100% 球型	5.1	4.9	1.1	1.6	69	-	-	78	79.0	11.5	-	12.7
2-23	A地区SX01	100% 球型	8.2	5.1	1.5	2.2	174	-	-	205	205.0	15.1	-	15.1
2-24	A地区SX01	100% 球型	5.3	3.6	1.45	1.2	67	-	-	79	80.0	15.2	-	16.3
2-25	A地区SX01	98% 球型	6.1	4.9	1.45	1.5	115	-	-	130	130.0	11.5	-	11.5
2-26	A地区SX01	100% 球型	7.7	4.8	1.7	1.6	173	-	-	204	205.0	15.2	-	15.6
2-27	A地区SX01	40% 球型	5.6	4	1.45	-	35	-	-	41	41.0	14.6	-	14.6
2-28	A地区SX01	40% 不明	6	3.8	1.8	-	46	-	-	54	54.0	14.8	-	14.8
2-29	A地区SX01	100% 球型	7.8	5.2	1.6	2.2	172	-	-	207	208.0	16.9	-	17.3
2-30	A地区SX01	40% 不明	5.5	4.2	1.2	-	39	-	-	47	47.0	17.0	-	17.0
2-31	A地区包含層	100% 球型	7.3	5.2	1.65	2	160	-	-	191	191.0	16.2	-	16.2
2-32	A地区包含層	50% 球型	8.2	4.7	1.6	-	81	-	-	92	92.0	12.0	-	12.0
2-33	A地区包含層	70% 不明	5.7	3.8	1.35	1.4	44	-	-	51	52.0	13.7	-	15.4
2-34	A地区SX01	40% 不明	6.2	4	1	-	37	-	-	38	37.0	2.6	-	2.6
2-35	A地区SX01	100% 球型	8.3	5.4	1.5	2.1	220	-	-	245	246.0	10.2	-	10.6
2-36	B-1地区SD02	90% 尺型	5	4.2	0.9	2.3	72	-	-	83	84.0	13.3	-	14.3
2-37	B-3地区SD22	90% 球型	6.5	4.3	1.7	1.6	103	-	-	117	117.0	12.0	-	12.0
2-38	B-3地区SE02	95% 球型	5.1	4	1.2	1.7	74	-	-	86	87.0	14.0	-	14.9
2-39	CH地区SD01	40% 不明	4.9	3	1.5	-	19	-	-	22	22.0	13.6	-	13.6
2-40	CH地区SD06	100% 球型	6	4.4	1.3	1.6	95	-	-	109	109.0	12.8	-	12.8
2-41	CH地区SD02	100% 球型	3.9	3	1.4	3.6	35	-	-	41	41.0	14.6	-	14.6
3-42	A地区SX01上層	90% 球型	5.9	4.4	1.5	1.8	88	-	-	105	105.0	16.2	-	16.2
3-43	A地区SX01上層	20% 球型	1.7	2.1	0.7	-	8	-	-	3	4.0	0.0	-	25.0
3-44	AM地区SE02	100% 球型	4.8	5.2	1.6	1.85	124	-	-	143	143.0	12.7	-	13.3
3-45	AM地区SX01上層	100% 球型	3.6	4.2	1.1	2.4	47	-	-	53	53.0	11.3	-	11.3
3-46	AM地区SX01上層	50% 球型	3.6	4.4	1.25	-	31	-	-	32	33.0	3.1	-	6.1

第1表 打出遺跡出土土錐観察表

③網のバランスを保つだけに用いるもの。

刺網がここでは例として挙げられているが、3分類の中で一番重量の軽いものと考える事ができる。デルタ化した水流の無い場所などには適したものであると言える。

7 結語

打出遺跡出土の管状土錘の用途を主眼において、海水・淡水時の重量変化の過程や、重量と孔径の関係などを見てきた。管状土錘など漁網に使用されたと考えられる土錘の場合、海中ないし水中に沈めた段階からの重量変化が、どの様な物であったのかと云う事は重要な視点であると筆者は考える。なぜなら素焼きの土錘の場合、水分を吸収する事は十分に考えられることであり、どの程度の吸水があるかによって漁網にとって最も重要な沈降力が変わって来ることが想像できるからである。沈降力が強ければ強いほど投網などでは漁として有効であり、また定置網や曳網などでも、網の中立と云う観点から有効であることは言うまでもない事である。ここでは、前述の結果などからどの様な事が考えられるかについて、若干はあるが考えたいと思う。

①管状土錘の重量変化から

結果として管状土錘の海中・水中時の重量変化には、大きく分けて2種類の傾向がある事は先述したところである。ここで注目したい点は、I類とII類の最大重量に達する過程である。I類は、緩やかに時間をかけてながら最大重量に到達し、II類は急激に到達する。いわゆる先に述べた沈降力の高低の問題が発生するのである。

網漁の中で、II類の特徴に合致する沈降力が確実に高く無ければならない漁は、先に述べた漁法の人別①の投網や一部の拖網が挙げられる。

では、I類の特徴に合致する漁法として挙げられるものにはどの様なものが有るであろうか。I類の特徴として緩やかに海中・水中に投下しても支障があまりないものは、漁方法の大別①の投網や一部の拖網以外の漁法が該当すると考える。言い換えれば、大別①の曳網・巻網や大別②の曳網・巻網などの沈降力の高くなき漁法が該当する。

刺網は、大沼氏の見解では小型軽量の魚網錘は止水域で使用したのではないか〔大沼1989〕と指摘し、関雅之氏もまた新潟県の細型管状土錘の使用状況から、止水域という限定した見解はされていないものの、ほぼ同様な結果を報告されている〔関1990〕。

打出遺跡では、この手のタイプの管状土錘は土錘の分類別から見た重量変化の過程ではなく、孔径と海水・水を含んだ時の重量の関係のグラフ(第7図)から見た場合、重量が50g未満のものの存在があり、そのものの扱いが微妙な所ではある。しかし大沼氏や関氏が提示している刺網用としている管状土錘の形態とは異なっている事から、現段階ではこの漁法については、省いても良さそうである。

②富山県下海岸沿い遺跡の出土土錘との孔径と重量の関係

富山県下で、打出遺跡と同様な海岸沿いの遺跡出土の土錘がどの様な傾向が見られ、本遺跡と比較して、どう云う状況にあるか、概観したい。

富山県下の海岸沿いの遺跡で、管状土錘の出土した遺跡は比較的多いが、重量などの必要な情報を報告書中に記載しているものは、少ない。そのため比較する事のできる遺跡は3遺跡である。

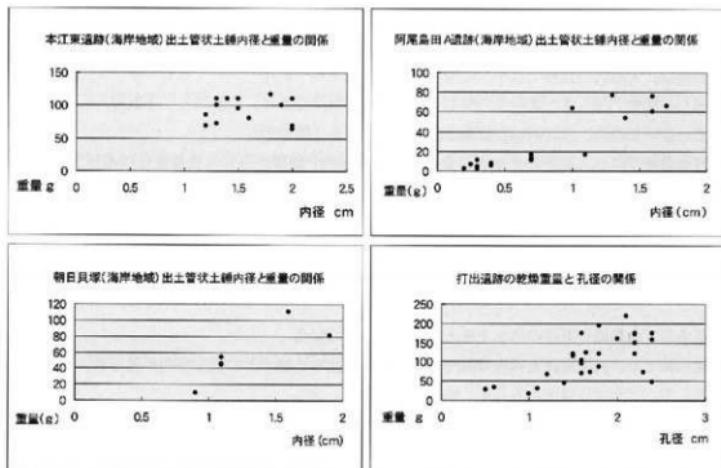
氷見市の朝日貝塚と阿尾島田A遺跡、新湊市の本江東遺跡である。時代は朝日貝塚以外のものは中世ではないものの、管状土錘は、現在使用している沈子（錘の呼び名）と形態状でさほど違いが見られないとされており、今回ここでは比較対象として使いたいと思う（第11図）。

まず孔径が、1.5cm前後のものでグループが分かれると云う打出遺跡での傾向は、3遺跡においても言えそうである。さらに、打出遺跡の場合50g未満・100g前後と150g以上と言う様に重量別に集中する部分が目立っている。これは阿尾島田A遺跡と朝日貝塚などにも見られる傾向であり、網漁の方法に類似する点が有るのか興味深い点である。しかし本江東遺跡の様に孔径が1.5cm～2.0cmの間で、80g～120gの部分に集中する遺跡もあり、遺跡によっては、採取するものが決まっていたため漁法も多種にわたるものはなかった事が考えられる。

8 今後の課題

浅学ではあるが、管状土錘の重量変化を中心にその結果から大まかではあるが、漁法の推定作業を行った。管状土錘のI類とII類の水中内への投下後の重量変化の特徴から、漁法としてどの様なものが考えられるものを考察して行ったが、対比可能な同様なデーターが少ない事からこの様な情報の増加を持って再考しなければならないと考える。

さらに、重量変化と管状土錘の形状に論理的な符号は存在するのかと云う点である。紙面の関係もあり、今回は論じていないが各時代の管状土錘に、ほとんど形態変化が見られないと言われている事は、返して言えば、漁法において最良なものであると云う事であり、網漁毎に形状の違う土錘が使用されていた事も考えられる。さらに、管状土錘が網漁にだけ使用されたものであるのかと言う点も注意したいものである。例えば卵形の管状土錘は、鳥取県青谷上寺地遺跡では、装身具の一種的な使われ形で出土していた事が確認されている〔鳥取2001・2002〕。この用途の別についても今後の課題としてあげたい所である。



第11図 富山県下（海岸沿い）出土管状土錘内径と重量の関係

参考文献

- 大沼芳幸 1989 「正伝寺遺跡出土の魚網錐について」『正伝寺南遺跡』 滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会
- 大沼芳幸 1990 「田んぼが魚を呼び寄せた!?」『財団法人滋賀県文化財保護協会紀要第4号』
- 大沼芳幸 1992 「人はそれでもタンパクシツを欲した」
『財団法人滋賀県文化財保護協会紀要第5号』
- 金田徳之 1977 「日本漁具・漁法図説」 成山堂
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3 本文編』
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4 本文編』
- 菅原正明 1985 「瓦器碗製作技術の評価をめぐって」『大阪文化誌18』
- 関 雅之 1990 「古代細型管状土錐考」『北越考古学第3号』 北越考古学研究会
- 園部 澄はか 1975 『日本の民具 第3巻 山・漁村』 慶友社
- 細辻真澄 2001 「任海宮田遺跡出土の土錐について」『富山考古学研究 紀要第4号』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 宮本秀明 1956 『漁具流法學(網漁具編)』 金原出版株式会社
- 埋蔵文化財研究集会第19回研究集会 1986 『海の生産用具』
- 森 隆 2001 「富山県出土の土錐集成」『富山考古学研究 紀要第4号』
- 森 隆 2003 「古代北陸の河川漁業に関する若干の考察」『統文化財学論集』
文化財学論集刊行会
- 山本寅人 1985 「石川県における古代中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会会誌第29号』
- 四柳嘉章 1987 「V 中世土錐の分類」『西川島』 穴水町教育委員会
- 和山晴吾 1997 「漁獵」『弥生文化の研究2 生業』 雄山閣
- 和田晴吾(ほか) 1997 「漁獵具」『弥生文化の研究5 道具と技術I』 雄山閣
- 和田晴吾 1982 「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』

写 真 図 版

写真図版1
(A地区)



A地区全景（北から）



A地区全景（東から）



SX1
川岸検出状況
(南東から)



SX1内サブ
トレングチ1土層
(南から)



SX1内サブ
トレングチ2土層
(南から)

写真図版3 (A地区)



SX1内サブ
トレンチ3土層
(南から)



SX1内サブ
トレンチ4土層
(南から)



SX1内サブ
トレンチ5土層
(南から)

SX1
三連壺出土状況



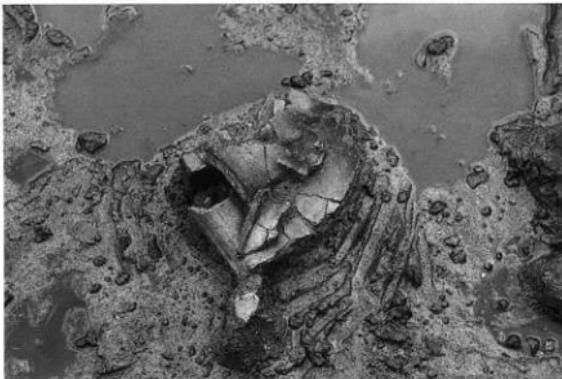
SX1
遺物出土状況1



SX1
遺物出土状況2



写真図版5
(A地区)



SX1出土状況3



SX1
木道検出状況1
(南西から)



SX1
木道検出状況2
(北東から)

写真図版 6 (A 地区)

A地区北
井戸集中区
(東から)



SE1
曲物検出状況



SE4断面
(北から)



写真図版7
(A地区)



SE4石組
検出状況
(北から)



A地区南噴砂1
(南東から)



A地区南噴砂2
(南東から)

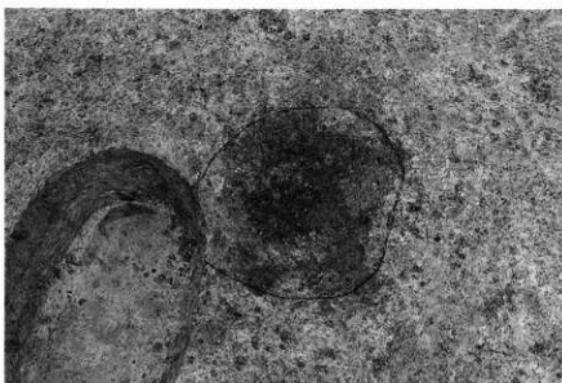


B-1地区遠景（北から）



B-1地区全景（西から）

写真図版9 (B-1地区)
(区)





SI2 完掘状況
(南から)



SI2
炉跡完掘状況



SI2
貯藏穴完掘状況



SI2出土状況



SI1・SI2
完掘状況
(南西から)



SI3・SI4
完掘状況
(南西から)



SI3
炉跡セクション



SI3
貯藏穴セクション



SI5 完掘状況
(西から)



SK17-18
出土状況1
(西から)



SK17-18
出土状況2



SK17-18
完掘状況
(東から)



SK29出土状況
(東から)



SK31セクション



SK31出土状況



溝集中区
完掘状況1
(南西から)



溝集中区
完掘状況2
(南西から)



SD38出土状況
(南西から)



SD1完掘状況
(南西から)



SD2完掘状況
(南西から)



作業風景

写真図版 17
(B-1 地区)



B-1地区
飛び地全景
(西から)



B-1地区
飛び地
土器出土状況



B-1地区
飛び地セクション
(噴砂跡)
(北から)



B-2地区全景（北西から）



B-2地区全景（南から）



SK11出土状況



SD45完掘状況
(西から)



SD90出土状況
(北西から)



SD91出土状況



戸状遺構
完掘状況1
(南西から)



戸状遺構
完掘状況2
(西から)



B-3地区全景（北から）



B-3地区全景（南西から）



SD9完掘状況
(西から)



SD23完掘状況
(東から)



作業風景



SE1完掘状況



SE2完掘状況



SE4完掘状況



SF1完掘状況
(西から)



SF1セクション
(西から)



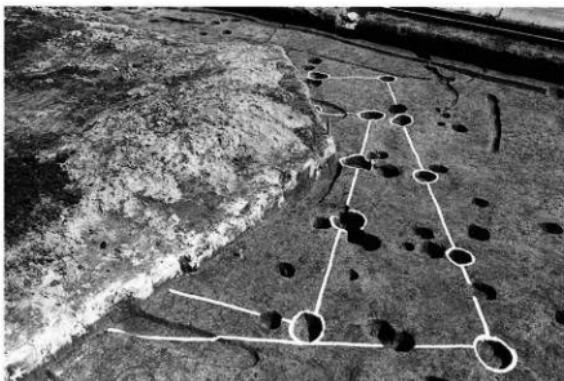
SF1出土状況
(西から)



C地区全景（北西から）



C地区全景（北から）



SB1・SB2
完掘状況
(南から)



SD42完掘状況
(北東から)



作業風景



SE1曲物出土状況
(南から)



SE1断ち割り
(南から)

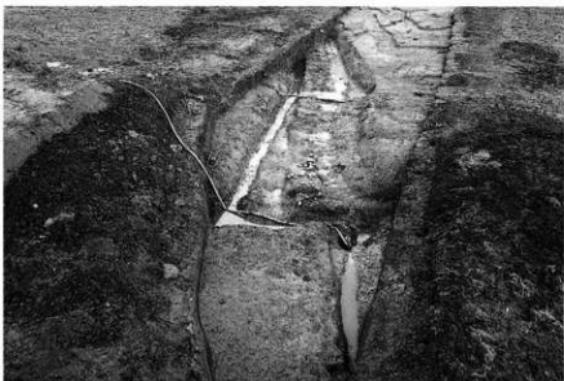


SE2完掘状況
(南から)

SE3完掘状況



SF1
拡張区完掘
(西から)



SF1完掘状況
(東から)





SF1完掘状況
(西から)



SF1セクション
(東から)



SF1セクション
(北西から)